
想いの行方

沢井 紗矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いの行方

【NNコード】

N4837BA

【作者名】

沢井 紗矢

【あらすじ】

須藤遙香 26才

夫の須藤一樹とは、初めての結婚記念日を迎えたばかり。

優しく頼りがいのある夫と幸せな毎日を送っていた。

そんな毎日も夫の浮気を知った事で崩れさつてしまつ。

信じていた夫の不倫。
その相手は……。

一人寝の夜

夕食後、須藤遙香は片付けをしていた手を止めて、リビングで窓ぐ
夫の一樹に目を向けてた。

均整のとれた身体を、ソファーに深く沈めた一樹の姿に胸がときめ
く。

社内恋愛期間も合わせれば、3年以上一緒にいるけれど、遙香は出
会つた頃と変わらない気持ちで一樹に恋していた。

遙香と一樹は、大手不動産会社の同期入社として知り合つた。

その年の新入社員20名の中で、一樹は能力、学歴共に群を抜いて
優秀だった。

それに加え、男らしい容姿と社交的な性格で、社内の女性達の憧れ
の存在だった。

遙香も、出会つてすぐに一樹のことを好きになつたけれど、なかなか
か気持ちを打ち明ける事は出来なくて、親しい同期として、接する
事しか出来ないでいた。

だから思いがけなく、一樹に好きだと告白された時は、自分でも信
じられない思いだった。

本当に、嬉しくて仕方なかつた。「どうした？」

視線に気付いた一樹が、見ていたテレビから遙香に目線を移す。

整つた顔にじつと見つめられ、遙香は顔が赤くなるのを感じ、慌てて視線を反らした。

「あの……「コーヒー」いるかな?」と思つて

「ああ、頼む」

一樹は、そんな遙香の態度に不思議そうな顔をしながらも頷いた。遙香はお揃いのマグカップにコーヒーを注ぎながら、気持ちの高まりを感じていた。

久しぶりに夫との時間を持てた幸せを噛みしめる。

一樹は2ヶ月前、会社の人事異動で営業部に配属になつていた。

新しい部署で、引き継ぎをしながらの仕事は忙しく、連日深夜帰宅が続いていた。

たまに早く帰つて来た日も、疲れているからと早くに浴室に入つてしまつて、同じ家に住んでいながら会話もままならないような生活だつた。

遙香は、入れたてのコーヒーをソファーの前にあるローテーブルまで運んだ。

「仕事は落ち着いてきたの？」

自分もその場に座り込み、カップを手にしながら、一樹に問いかける。

「いや、まだ当分忙しい」

一樹も湯気の立ったコーヒーを、ブラックのまま口にした。

「うなんだ… 大変なんだね」

気持ちが沈んでいくのを感じながら、相槌をついた。

元々同僚だった為、営業部の仕事が忙しい事は理解している。

仕事なんだから、わがままで言えない。

そう思いながらも、連日一人での夕食はとても寂しものだった。（早く仕事が落ち着いてくれればいいのに…）

口には出さないけれど、いつもそう考えてしまっていた。

「遙香？」

一樹の怪訝そうな声が聞こえて来て、遙香はハッとして顔を上げて言った。

「今日は早く帰つてきてくれて良かつた。金曜日だから接待があると思つてたから……一人でゆっくりできるの久しぶりだよね」

「ああ、最近は休みも無かつたからな」

一樹は小さなため息を吐き、その様子に遙香は心配そうに顔をひそめた。

「大丈夫？ マッサージでもしようか？」

「大丈夫だよ」

疲れた顔に小さく笑みを浮かべる一樹を見ていると、切ない気持ちが込み上げて来た。

「明日も仕事だし、そろそろ休むか」

言いながら一樹はソファーから腰を上げた。

「明日も仕事なの？ 土曜日なのに……」

「仕事が溜まつていて今週も休日出勤だ。帰りはかなり遅くなると思つから、遙香は先に寝ててな」

そう言つと、玄関の側にある自分の部屋へ向かおつとした。

遙香達の住むこのマンションには、結婚した時に引っ越してきた。

都内を走る私鉄の駅から、徒歩で10分程の高台にあり、新築で間取りが2LDK有る。

新居を探して、物件巡りをしていた二人は、一目で気に入り、すぐ契約をした。

一樹が、それぞれ個室をもとつと提案してきたのはその時だった。

「それじゃあ、ただの同居人みたい……」

氣の進まない遙香の言葉に、

「夫婦でもプライベートな空間は必要だと思つ。もちろんお互いの部屋へは自由に入つていいし、隠し事をしようとも思つてない。ただ俺は仕事を持つかえる事も多いし、一人で集中出来る環境が必要だ」

一樹はそう説得し、最終的には遙香も納得した。納得はしたけれど、どうしても、時々寂しい気持ちになってしまつ。

特に今日は……。

「ねえ一樹、今日は一樹の部屋で寝てもいい？」

遙香の言葉に一樹は少し驚いたような顔をし、それから困ったような表情になつた。

「「めん、明日早いんだ。今日はゆっくり休みたい」

「あつ、せうだよねー。『めんなせこ、疲れてるの』
『元の元の』

一樹に抱呑された事に少し傷つきながらも、遙香は無理に笑顔を作った。

「いや……じやあもひ寝るから、おやすみ

一樹は、遙香に背を向けて浴室の扉を開け、振り向くことなく入って行った。

「おやすみなさい……」

閉じられた扉を見ながら、遙香は深いため息をついた。

(もつりし)一樹と話したかった、一緒にいたかった)

仕事が忙しくなつてから、同じベッドで眠る事もなくなつていた。

一緒にいる時間が減つたせいが、一樹との間に距離が出来たような気がするらる。

(寂しこよ、一樹)

遙香は、声に出せなかつた想いを心の中でつぶやいた。

夫の嘘

田羅日の午後。

遙香は、実家の近くにある大型ショッピングセンターを訪れていた。来月出産予定の友人へのお祝いの品を貰い、その後、久しぶりに実家に寄る予定でいた。

ベビー用品店やインテリア用品店を悩みながら見て回り、結局無難にブランドの洋服と小物を買った。

その後、洋服やアクセサリーの店に何件か寄り、最後に本屋の雑誌のコーナーに向おりとしている時に声をかけられた。

「遙香？」

名前を呼ばれ、振り返った先にはよく知っている顔があった。

色素の薄い、髪と肌。

長めの前髪の間から、切れ長の涼しい目が遙香を見つめていた。

「諒一、どうしてここに？」

驚く遙香に、諒は呆れたような顔をした。

「それこいつのセリフ。お前!」
「何してんの?」

「私は買い物ついでに実家に寄りついと想つて」

言いながら、手に持ったブランドのロゴ入り紙袋を諒の前に出して見せた。

遙香と久賀諒は、同じ地元で同じ中学校に通う同級生だった。

クラスが一緒だったこともあり、それなりに親しくしていたけれど、高校が別になり、いつの間にか交流が無くなっていた。

遙香が諒と再会したのは、2人が偶然にも同じ会社に入社したからだった。

同じ年の一人だけれど、短大卒業の遙香の方が、入社は一年早かった。

総務部で新入社員の名簿の管理をしていた遙香は、諒の名前を発見した瞬間、驚き目を丸くした。

そして、すぐに諒の配属先である設計部に行き、諒をもつと驚かせたものだった。

諒は愛想の無い性格のせいか、あまり同僚と親しくすることは無かつたけれど、遙香とは昔馴染みな事もあってか、気安く話すことが多かった。

「久しぶりだね、私が会社辞めて以来だから一年ぶりかな。元気だった？」

遙香は、久々の再会に笑顔を浮かべながら言った。

「実家でなんかあつたのか？」

相変わらず素っ気ない諒に、遙香は苦笑いをしながら答える。

「別に何もないよ、最近寄つてなかつたから、買い物ついでに顔出しだけ」

その言葉に、諒は怪訝そうな顔をした。

「じゃあ須藤さん一人で行つてるのか？」

「え？」

「恒例のバーべキュー。お前が行かないなんて珍しいな」

「え……バーべキューって……私、聞いてない」

遙香の顔が一気に曇つた。毎年恒例のバーべキュー大会。

会社の親睦会費を使って、年に一度大々的に行われていた。

社員だけでなく、その家族も参加可能で遙香はそれを毎年楽しみにしていた。

(……………）一樹は教えてくれなかつたんだわ

考え込み、視線を下げていた遙香は、

「もう買ひ物終わつた？」

諒の声に顔を上げ頷いた。

一人でショッピングセンターを出て、初夏の強い日差しの中、家迄の道を歩いて行く。

「そんなにバーベキュー行きたかつたわけ？」

すっかり沈んだ様子の遙香を横田で見ながら、諒が言った。

「行きたかったよ。楽しみにしてたし」

「ふーん、俺は面倒としか思えないけど」

諒は興味無さげに言ひ。

「一樹は、どうして言つてくれなかつたのかな…………」

遙香は、恥きに近い小さな声を出した。

「須藤さんは、今日どうしてんの？」

「仕事に行くつて言つて、朝早くから出かけたの。最近忙しいみたいい」

「ならどうにしろ行けなかつたんだし、いいんじゃねえの？ どうせ須藤さん抜きじや参加出来ないんだし」

遙香は、不満そうに眉をよせて諒を見た。「さうだけじ、言つてくれなかつた事が気になるの。昨日は早く帰つてきたから話をする時間はあつたのに」

「行けないのにわざわざ話して、がっかりさせることないと思つたんじゃねえの？」

(やうなのかな……仕事が無ければ言つてくれた？)

遙香は、隣を汗ひとつかかずに歩く諒を横目で見た。

まるで諒の回りにだけ、冷たい空気が流れていったようだつた。

「ねえ……一樹の仕事が忙しいのつてこつまで続くのかな？」

「さあ、俺に聞くなよ」

「だつて同じ会社だから、少しほ分かるでしょ？」

「知らない。そんな事本人に聞けよ」

冷たくも感じる諒の素つ氣ない態度に、遙香はうつむく。

「聞いたけど、当分忙しつつ……」

「じゃあ、なんなんだろ?」

諒は、浮かない顔をしている遙香に視線を向けた。

「……須藤さんの仕事が忙しいこと何か問題でもあるのか?」

「問題なんて無いけど、でも最近ずっと帰りも遅いし、ろくに話も出来ないし、夕御飯も毎日一人で少し寂しい……」

悲しそうな顔をして遙香は言ひ。 「須藤さんここで言えば、少しは早く帰つてくるんじゃねえ?」

「言えないよ。一樹は遊んでる訳じゃないんだし」

「それでもお前の気持ちは伝えていいんじゃないの? 須藤さんはお前の夫だろ。思つてゐ事はちゃんと言えよ」

諒は淡々と言いながら、立ち止まり遙香に体を向けた。

「じゃあ、俺二つちだから」

遙香の実家と、反対の方向を指差した。

「あつ……そうだね。『めんね、久しぶりに会つたのに私の話ばか
りじて』

「別にいいけど」

いつもの事だると、諒は無表情でボソッと言つて、その場を去つて
いった。

素つ氣ないけれど、諒は遙香の話を真剣に聞も、けやこと考へて返
事をしてくれる。

そして、それは二つも的確だった。

(諒の言つとおり、一樹に話してみよつがな)

やつ思いながら、遙香は実家へ続く道へ足を向けた。「お歸りなさ
い」

深夜1時過ぎ。

遙香は、静かに玄関を開けながら入ってきた一樹を出迎えた。

「起きてたのか？ 先に寝てろって言つただろ」

「あ……」ぐもんなどひよけり

一樹の言葉に苛立ちが餘まれてるのを感じ、遙香は反射的に謝つてしまふ。そんな遙香を見て、

「いや……起きて待つてられるヒフレッシュシャーに感じじるから、俺の
事は待つてなくていいからな」

一樹は、わざわざ柔らかな口調で言つた。

「分かった。でも今日は聞きたい事があつて

「聞きたい事?」

一樹は冷蔵庫のミネラルウォーターを取出しながら、横田で遙香を見た。「今日恒例のバーべキューだつたんでしょう?」

「え?」

遙香の言葉に、一樹は驚いたよつた声をあげた。

「今日、実家に帰つた時に偶然、設計部の久賀君に会つたの。その時に聞いたんだけど……」

セツヒツと、一樹は眉間にシワを寄せた険しい表情になつた。

「一樹?」

不安になり呼びかけると、一樹は視線を逸らしながら言った。

「そういえば今田だつたな。仕事で行けないと思つてたから、すっかり忘れてた……それより久賀とは食事にでも行つたのか?」

「え? 行つてないよ。少し話はしたけど、すぐに別れたし。相変わらず素つ気なかつたしね」

一樹は少し考え込んでから、バツが悪そうな顔をした。

「『』めんな、同期とも再会出来るつて楽しみにしてたのにな

「ううん、仕事が優先なのは当然だよ。ただ一樹が言つてくれなかつたのが気になつただけなの」

それに……と続けて遥香は視線を落とす。「最近、全然話が出来なかつたから……一樹と話したかったの」

遥香は、一樹が近づいてくる気配を感じながら言つた。

一樹は遥香の頭にそつと腕を伸ばすと、

「いめんな

と囁き優しく髪を撫でた。

「遥香に随分寂しい思いさせちゃつたな

頭上から響く心地よい低い声に顔を上げると、優しく微笑む一樹の顔があつた。

「今日、一緒に寝ようか……」

その言葉に、遥香の胸に喜びが広がつていいく。

それからまで感じていた、漠然とした不安は、消え去つていた。

翌朝一樹の腕の中で目覚めた遥香は、幸せそうに微笑みながら、仕事をへ行く一樹の背中を見送った。一樹の勤める、NA開発は、東京の大手町にある。

自宅の最寄駅から乗り替え無しで、40分程。

朝のラッシュだと、更に時間がかかり、座れる訳もない通勤電車の中は、かなり体力を消耗する。

一樹は寝不足のせいもあり、いつも以上に疲れた体で地上への階段を上がる。

長く地下鉄に乗っていたせいか、朝の光が溢れる外に出ると解放感でいっぱいになった。

初夏の強い日差しを防ぐ、日傘をさす女性達を追い越しながら歩いていると、前方にゆっくりと歩く見知った人物を見つけ、一樹は顔をしかめた。

「久賀」

追い付き、隣に並び声をかける。「須藤さん……おはようござこます」

一樹に気付き、諒が小さく頭を下げる。

一樹と諒は、年も入社年度も所属部署も違っていて、接点があまり無い。

お互に、遙香から話を聞いているくらいで、ほとんど交流がなかつた。

「昨日、遙香に会つたんだって?」

めったに話す事のない一樹に声をかけられ、諒は一瞬怪訝そうな顔をしたけれど、

「はい」

すぐについものの無表情になり答えた。

「遙香にバーべキューの事、話したんだってな

一樹は諒にあわせて、歩く速度を落としながら言葉を続ける。

「今度、偶然会う事があつても、会社の事は言わないでくれないか」

「……なんですか？」

諒は、一樹を横田でチラッと見ながら言つ。

「ひとつもこりとあるんだ、とにかく余計な事は言つないよ

「……」

一樹は鋭い目を諒に向けた後、諒を置いて足早にその場を去つて行った。

疑惑

7月の中旬。

ベランダで洗濯物を干し終わった遙香は、急いで部屋へ戻り窓を閉めた。

朝から気温は上がり続け、少し外にいただけで、背中は汗でいつぱになる。

遙香はアイスティーを入れると、ソファーに座り一息ついた。

エアコンの効いた部屋で冷たい飲み物を飲んでいると、体に籠もった熱はすぐにひいていった。

遙香は、涼しげな色合いのグラスを見つめながら、憂鬱そうにため息をついた。

あのバー・ベキューの日から、もつ少しで1ヶ月になろうとしていた。

一樹の仕事は相変わらず忙しく、連日の深夜帰宅が続き、あの日以来一緒に過ごせる夜は、一度も無かつた。

これ程忙しく、仕事が続くと、一樹の体を心配する気持ちが日に日に大きくなつていった。

だから一樹の様子を見たくて、嫌がられるのはわかつていたけれど、深夜まで起きて帰りを待つてることにした。

もし体調が悪いようなら、病院に行くように勧めないと……一樹は自分ではなかなか行かないから。

そう思い、いつもより注意深く一樹の様子を見ていて……そして、気が付いてしまった。

一樹は浮気しているのかもしないと。確証があるわけでは無かつたし、一樹の態度が激変したわけではなかつた。

けれども、わずかな違和感が積み重なつていくと、

(本当に仕事なの?)

遙香の心に、そんな思いが生まれて來た。

何度も一樹に聞いつけ、でも結局何も聞けなかつた。

証拠があるわけじゃないから、はぐらかされるかもしない。

それ以上に一番怖いのは、一樹が浮気を認めた場合だつた。

(そんなの、絶対に嫌……)

一樹の口から、他の女性の話を聞くなんて耐えられなかつた。

焦りにも似た不安を抱えながら、それでも一樹に聞く勇気も持てず、時間だけが過ぎていき……そして今日、ついに証拠ともいえる物を手にしてしまつた。

クリーニングに出でたとおもてていた、ワイシャツの胸ポケットから、それは出てきた。

血のように深い赤の石がついた、小さなピアス。

ローテーブルの上に置いたそれを眺めていると、見つけた時の衝撃が蘇つて来るよう、心臓がドクンドクンと激しく波打った。（どうして胸ポケットにピアスが？）

いくら考へても、2つの理由しか思いつかなかつた。

ひとつは偶然入つてしまつたといふ事。

……でもそれだと、ピアスの持ち主は、一樹にほとんび密着する位の距離まで近づいた事になる。

一つ田目に想いついたのは、ピアスの持ち主が遙香に自分の存在を知らせる為、故意に入れたといふ事。

どちらにしても、遙香にとっては最悪だといつ事に変わり無い。

浮氣なんて思い込みかもしれない。

ピアスだって会社の女の子のもので預かってるだけかもしれない。

そつやつて良く考えようとしても、すぐに思考は悪い方へと向かって行き、一樹が浮氣しているのは、もう間違いない事としか思えなくなっていた。

そして、ピアスは故意に入れられたに違いない。

根拠は無いけれど、そう確信していた。日付が変わる頃。

遥香と一樹は、リビングのローテーブルを挟んで向かい合っていた。

テーブルの上には、赤い石のピマス。

遥香は一樹が帰宅すると、すぐに話を切り出した。

真実を知るのは怖いけれど、一樹への不信はどうんどうん膨らんでいき、黙っている事が出来なくなつた。

一樹は黙り込み、ピアスを凝視している。

何を思つてゐるのか、表情からは読み取れない。

遥香は一樹の言葉を待つていたけれど、沈黙に耐えられなくなり、口を開いた。

「一樹、このピアスの人と浮氣してるの？ 仕事つて言つのは……嘘だつたの？」

感情的にならないよう、抑えた声を出す。

一樹は深い息を吐いてから遥香を見ると頷き、

「悪かった」

そう言いながら頭を下げた。一樹の言葉に、遙香は大きなショックを受け、黙り込んでしまう。

覚悟はしていたはずなのに、現実に一樹の口から出た肯定の言葉に、胸に突き刺さるような衝撃が襲つて来る。

一樹は、視線を落としたまま話し続ける。

「仕事が忙しいのは嘘じやない。でもそのペースの持ち主とは、何回か会つた

「……」

遙香は膝の上に置いた手を強く握りしめ、俯いた。

「遙香、悪かった……」

正面の一樹が頭を下げるのが気配で分かる。

「……どうして浮氣なんてしたの？ 私の事が嫌になつたの？」
「遙香は向む悪くない、ただ間が差しただけだ……悪かつた、もうこんな事一度としない」

遙香は、涙の滲んだ目で一樹を見つめる。

「相手は誰なの？」

「接待で使っていた店の子だ、でももつ会わないから」

「でも……仕事で使つてるのなら、そのお店にまた行くんでしょう

「…」

感情的になつてはいけないと思つてゐるのと、抑えられない。

頭の中は、悲しみと怒りと嫉妬心でいっぱいだつた。

「その店はもう使わない、約束する」

「相手の子はそれで納得するの？……」ジのペマスはその子がわざと入れたんじゃないの？」

一樹は驚いたように田を見開く。

「彼女はそんな事はしない、これが入つたのは偶然だよ」

「もし別れたくないって言われたら、どうするの？ それでも、もう会わないって言える？」

遙香の瞳から涙がこぼれ、頬を伝つていった。「ああ、何を言われても、もう会わない。本當だ、約束する」

遙香は止まらない涙を手でぬぐつ。

一樹はそんな遙香に近づき、やつと肩に手を回して自分の方へ引き寄せた。

「遙香、本当にごめん。もう一度としないから……」

反射的にびくつとする遙香を優しく抱き締める一樹の声は、いつも自信に溢れた力強さではなく、震えていた。

遥香は腕の中で手を閉じた。

いくら謝られても、今回の事を無かつた事には出来ないと思った。

一樹が思っている以上に、遥香はショックを受け、深く傷ついていた。それでも、

(離れられない)

一樹を好きだという気持ちの方が大きかった。

遥香は一樹の広い背中に腕を回した。

一樹はそれに応えるように、遥香を抱きしめる腕に力を込める。

その夜、遥香は朝まで一樹の腕の中にいた。翌日から、一樹の様子が変わってきた。

遥香に対する態度が優しくなった。

帰宅時間も早くなり、仕事で遅くなる時はまめに連絡をくれたりと、気を使つてるのが伝わってきた。

遥香も一樹が居心地良く過ごせるように、家中を今迄以上に綺麗に掃除したり、料理も栄養に気を使つたものを工夫して作つた。

浮気が発覚する以前より、夫婦仲はうまくいっているように見えた。

けれど……。

【「めん。急に接待が入った。なるべく早く帰るよ」
【】

遙香は一樹からのメールに、ため息をついた。

どうしていつもなく落ちつかなく、不安な気持ちが膨らんでいく。

(本当は仕事じゃないんだよ……彼女とは本当に別れてるの?..)

いへり連絡をくれても、すぐに疑いの気持ちを持つてしまう。

以前のようこそ、一樹の言葉を素直に信じる事が出来なくなっていた。

再び

「明日京都に出張なんだ、遅くまで予定が入ってるから一泊して来る」

「……え？」

夕食の席での一樹の言葉に、遙香は箸を止め、顔を強ばらせた。

「……泊まらないとダメなの？」

「ああ、部長に同行するから俺一人帰る訳にはいかないだろ」

一樹は、ビールの入ったグラスを持ち上げ口をつけた。

「さう……明後日は何時に帰つてくるの？」

一樹はビールを飲み干し、空になつたグラスをテーブルに置くとため息をついた。

「まだ分からない。仕事の状況によるから」

少し不機嫌そうな顔をして、サーモンの刺身に箸を伸ばした。

一樹の予定を把握したがる、遙香の態度にうんざりしているようだ

見えた。

あの日以来、一樹の所在がわからないと、それだけで不安を感じる様になっていた。

それで、つい束縛する様な態度ばかりとなってしまった。

初めのうちは、罪悪感からか、一樹も遙香を安心させる様に、ちゃんと答えてくれていた。

でもそれが続くうちに、だんだん面倒に感じて来ているようだった。

遙香にとつては忘れられない辛い出来事で、今でも心の傷は癒えなければ、一樹にとつてはもう過去の話になっているようだつた。翌朝一樹を見送った遙香は、どうしようもなく気持ちがざわついて、落ち着かない気持ちでいた。

(一樹は本当に出張なの? また浮気してゐるんぢや)

自分でも嫌になるくらい、一樹の事を疑つてしまい、悪い事ばかり想像してしまう。

(確かめたい……でも……)

やり直すと決めたんだから一樹を信じないと。

そう自分に言い聞かせながらも、確かめたい思いとの間で気持ちが揺れていた。

家事をしながらも、その事が頭から離れず、午後になるとついつい、

電話の受話器を持ち上げ、ためらいながらも番号を押していた。

「キドキとしながら、相手が出るのを待つ。」

かけた番号は一樹の会社の直通番号だった。

もし出張が嘘だったら、一樹が出るかもしれない。

不在でも、アシスタントの女性が出るだらうから、せり気なく予定を聞けばいい。

後ろめたさを感じながら呼び出し音を聞いていた。

「ZEA開発でいらっしゃいます」

高い女性の声が聞こえてきた。

「あの、須藤一樹の家の者ですが……」

一樹がいなかつた事にホッとしながら、電話の相手に告げるとい

「あれ、遙香さん?」

甲高い女性の声が遙香の言葉を遮った。

「あ、私、前田です、前田美紀。遙香さんお久しごりです」

「え……あの……」

「惑う遙香に美紀は明るい声を出す。遙香は少し考えて、その声の持ち主を思い出した。

「美紀ちゃん？ 久しぶり。営業部に異動になつてたのね」

美紀は遙香の後輩だつた。

短大も一緒に、配属先も同じ総務部ということもあって、遙香はよく面倒を見ていて、仕事帰りと一緒に食事をする事もあつた。「あつ、はいそんなんです。先月から異動になつて……須藤さんに聞いてませんか？」

「うん、一樹は特に言つてなかつたから」

「そりなんですか、そりいえば今日はどうしたんですか？」

「あの……今日の一樹の予定を知りたくて」

「予定ですか？えつと京都に出張ですけど」

不思議そりな声を出す美紀の言葉に、遙香はホッと息をつく。

(良かつた、本当に出張だつたんだ)

安心したら、じやけを予定を調べた自分が恥ずかしくなつた

一樹に、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

そんな遙香の様子を知るはずもなく、美紀は言葉を続けてきた。

「遙香さん体の調子はもう大丈夫なんですか？」

「……体つてなんのこと?」

美紀の言つてる意味がわからず、遙香は小首を傾げて言つた。

「え? 須藤さんがそう言つてたから……この間のバーべキューも遙香さんはそれで来れなかつたんですね?」「一樹がそつ言つたの?」

なぜ一樹はそんな事を言つたのだろう。

話が見えず遙香は困惑つ。

「そうですよ、私バーべキューに遙香さんが来ると思つてたから、久しぶりにいろいろ話したいと思つてたんです。でも須藤さん一人で来たから、どうして来ないのか聞いたんですよ。そしたら眞合が悪いから家で休んでるつて……」

「え……一樹はバーべキューに参加したの?」

美紀の言葉に心臓を掴まれたような衝撃を受け、遙香は震えた声を出した。

「はい、来ましたよ。途中で帰つたみたいだけビ……遙香さん、もしかして知らなかつたんですか?」

不穏な気配を感じたのか、美紀は声のトーンを落とした。

「あつ……あまり詳しい事は聞いてなかつたの。楽しみにしてたのに行けなくて残念だつたから、一樹も氣を使って言わなかつたのかも」

「もうだつたんですか～私、まことに事言つたのかと焦つちゃいました」

咄嗟に「まかした遙香の言葉に、美紀はほつとした声で言つた。思い返してみれば、遙香がバーべキューの話をした時、一樹はどこか様子がおかしかつた気がする。

（でもどうして私にバーべキューの事黙つてたの？　どうして一人で行つたの？）

「……美紀ちゃん、その時一樹は誰かと一緒にやなかつた？」

もしかして、その頃付き合つていた女性を連れていったのかもしないと思つた。

「いえ、一人でしたよ」

（それならどうして、私に嘘をつくるの？）

一樹が何を考えているのか分からぬ。

以前迄は一樹を誰よりも近くに感じていたのに、今はとても遠く感じる……自分の夫なのに。

「あつ！ でも、須藤さんずっと門脇さんと一緒にいましたよ」

美紀が大事な事を思い出したとでもこいつよひ、一際大きな声を上げた。

「有里と？」

遥香は美紀の言葉に眉をひそめた。

門脇有里は、遙香と一緒に同期で役員秘書を勤めている。

年は遙香の2歳上。一樹と同じ年だった。

「どちらかといえばおつとりした性格の遙香と、自分の意見をはつきりと口にする有里は、性格は反対なのになぜか気が合い同期の中でも最も親しくしていた。

でも一樹とはそこまで、親しくなかつたはずだった。

いつの間に、それ程仲良くなつたのだろう。

一樹は何も言つていなかつた。

有里の事を気にしながら、遙香は口を開いた。

「美紀ちゃん仕事中なのに」「めんね、話しこじやつて」

「大丈夫ですよーみんな外出してるし、今日は結構暇なんです」

電話も全然鳴らないし、と美紀は続ける。

そして遙香が、そろそろ電話を切ろうかと思った時に美紀の言った言葉は、遙香に更なる衝撃を『えた。

「やつだ、やつをつい忘れましたけど、須藤さん今日は遅くなるかもです。帰社予定が20時になつてます」

「一樹の出張は泊まりじゃないの？」

信じられない思いで問いかける。

「え？ はい、夕方には向こうでの仕事終わるみたいですね。部長と一緒にから一度会社に戻るやつです」

「……そつなの、ありがとう、教えてくれて」

混乱しながら、なんとか美紀に礼を言い、挨拶もそこそこに電話を切つた。

美紀に変に思われたかもしれないけれど、取り繕う余裕が無かつた。
遙香はふらふらとソファー迄行き倒れるよつに座り込んだ。

一樹は今日帰つて来ない。

出張が田帰つならびに泊まるところのか…考えるまでも無かつた。

(まだ、続いていた…別れてなかつた…一樹はずつと嘘をついていた…)

遙香はこみ上げる怒りに耐えるようと、ギュッと手を握り締めた。

頭がクラクラして気分が悪い。

一樹が許せなかつた。

遙香がやり直すよう努力している時も一樹は裏切りを続けていた。

遙香は大きく息を吐き、自分を落ち着かせようと努力した。

じつと一点を見つめたまま長い事考えて続けていたけれど、やがて立ち上がり、バスルームへ向かつて行つた。

知つてしまつた以上、黙つて一樹の帰りを待つ事は出来ないと思つた。

(一樹に会いに行こう。相手の人人が一緒なら、別れるようにお願いしてこよ)

遙香は化粧をし、着替えると、既に薄暗くなつた駅迄の道を急ぎ歩いていった。

真の相手

会社がある大手町についた時には、もう8時を過ぎていた。

遙香は焦りながら、地下通路を早足で通り過ぎ、ビルの近くに出入り地上への階段を登った。

美紀の話だと、一樹は8時頃会社に戻るという。

それから何時に会社を出るかは分からなかつたけれど、それ程時間をかけて出てくるだらうと思つた。

一樹に電話して来ている事を云えようかと思つたけれど、思い直した。

連絡して考える時間を持ったら、またしまかされてしまうかもしない。

もう嘘をつかるのは嫌だった。

社員通用口が見え、目立つ事なく見張れる位置で出でてくるのを待つ事にした。

もう8時を大分過ぎているのに、今から帰る社員が次々と通用口を通り抜けていく。

ぽんやつとしてこては、一樹を見過してしまったやうだった。

そつやつて、いつ出でるかわからぬ一樹を待ち続け、やつとその姿を見つけた時には、9時を大分過ぎていた。一樹は通用口から出てくると、そのまま駅とは反対方向に歩き、しづらへやると歩みを止めその場に立ち止まつた。

遥香は一樹の元へ急ぎ近寄つて行つたけれど、

「お待たせ」

一樹に駆け寄りながら囁ひ高い声に動きを止めた。

「俺も今来とこだよ」

振り返つた一樹が、この上なく優しい笑顔で答える相手……それは門脇有里だった。遥香は凍りついたように、その場から動けなくなつた。

どうして有里が？

一樹の浮氣相手は接待で使つ店の子だったはず。

一樹も有里も、遥香に気がつく事はなく、楽しそうに何か話している。

その様子はとても親密で、ただの同僚には見えなかつた。

(どういふ事？今度は有里と付き合つ出したの？)

混乱する遙香の目に、一樹にもたれかかる有里と、そんな有里の腰に自然な動きで手を廻す一樹の姿が映り込む。

(違う……一人はもつと前から関係していた)

寄り添いながら歩き出す一人は、とても始まつたばかりの間柄には見えなくて、その瞬間思い出した。

一樹のポケットに入っていた血のような色のピアス……あれは有里の物だったということを。

あれは、数年前一緒に旅行したバリで有里が買った物だった。

(どうして気づけなかつたんだろう)

茫然とする遙香の視線の先、二人の前にタクシーが停まるのが見えた。

呼び止めたいのに声が出せない。

一樹が先にタクシーに乗り込み、続いて有里が腰を落とし優雅な動きで乗り込んでいく。その時一瞬有里は遙香を見つめ、微笑んだ気がした。有里がタクシーに乗り込むと、一樹は、

「品川迄」

運転手にそう告げた。

夜のオフィス街を抜け、大通りに出ると、隣に座る有里に腕を伸ばし、その肩を引き寄せる。

女性にしては長身の有里も一樹から見れば小さく、腕の中によつぱりと収まってしまう。

有里は満足そうに微笑み一樹を見上げた。

「ねえ、今日は帰らなくていいんでしょ？」

「ああ」

一樹は、微笑み有里の身体を更に引き寄せた。

「じゃあ携帯の電源切つておいて」

「え？」

「せっかく久しづつで見つめてくる有里に一樹は少し考えた
嫌だわ」

「いじでしょ？」と上田づかいで見つめてくる有里に一樹は少し考えた
後、

「わかった」

そつ答えるながら携帯を取り出し、電源をOFFにする。

それを見届けると有里は一樹にもたれかかり目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4837ba/>

想いの行方

2012年1月14日19時54分発行